おてら

報恩講

十一月十六日（月）

午前十一時より

浄土真宗のご開祖親鸞聖人の御祥月命日にご宗祖のご苦労を偲び感謝し、そのみ教えを味わせていただき、明日の私の生きる糧とさせていただく法要です。

どうぞ一度ご参加下さい。



親鸞聖人影像　安城御影副本
（西本願寺蔵・国宝）

常例十六日講
毎月十六日午後一時より
お経練習・法話会

写経会
毎月第一・四金曜日
午後一時より

我執

住職　蒲原霊英

親鸞聖人は、承元元年（一二〇七）三十五歳の時に越後に流罪となられ、建暦元年（一二一一）十一月十七日に赦免され、信濃の善光寺に参詣されてから関東へ向かわれました。そして、越後に戻られた奥様の恵心尼様から、京都で聖人のお世話をされていた末娘の覚信尼様へ当てられたお手紙である『恵心尼消息』によると、建保二年（一二一四）、現在の群馬県邑楽郡明和町辺りである佐貫という所で、聖人が三部経を千部読誦しようとされたようです。三部経とは『仏説無量寿経』『仏説観無量寿経』『仏説阿弥陀経』のことで、これらのお経を千回声に出して読もうとされたのです。

佐貫は地理的に洪水が頻発する土地だったそうで、この年の夏にも東国の洪水の記述を見ることができます。おそらく聖人は、水害に遭った民たちに請われ、何とか救ってあげたいと念じられて、「衆生利益」のために三部経の千部読誦を始められたようです。しかし聖人は、「名号のほかにはなにごとの不足にて、かならず経をよまんとするや」と、自分の執った行為や考えが間違いであったことに気付かれ、これを四、五日で中止されました。すなわち、「唯々阿弥陀様のおはからい（他力）におまかせするだけで良いのに、自分のはからいで、自分の力で千回読誦したら人々を救えるなどというのは、私の思い上がりでしかなかった」と思い直されたのでした。そして、人間の自分の力に執着する心は恐ろしいと言われています。

私自身、悪いことばかり続いてつくづく嫌になってしまう時など、ふと阿弥陀様の前で手を合わせながら、良くなるようにお願いをしそうになる瞬間があります。でも、すぐに「違う違う」と思い直して、阿弥陀様に、自分勝手なお願いをしようとしたことを謝っています。阿弥陀様は、別にこちらがお願いなんかしなくても、ちゃんと私のことを見護ってくださっています。自分にとって都合が悪いことが続くという事象も、何かもっと大事になる前に、今の自分の言動を省みる必要があるからこその、阿弥陀様のおはからいなのだろうと受け止めさせていただけば良いのです。それなのに、阿弥陀様に強く願ったら自分の都合良く物事が運ぶのではないかと思うなど、なんと自分勝手な思い上がった考えなのでしょう。

毎度毎度「ダメだな私」と思いつつ、次元が違うのですが、この聖人の佐貫でのエピソードを思い出しては、「親鸞様でもこういうことがあったんだから」と少し勇気付けられながら、改めて感謝のお念仏を申す私です。合掌

総永代経法要
彼岸中日法要



九月二十日から二十六日までの秋彼岸の彼岸の入り二十日午後七時から、この一年間に永代経をご進納くださった方々をご招待し、総永代経法要が営まれました。

献灯・献花・献供物の後に読経が始まり、参拝者の方々が順次ご焼香。御文章拝読の後、住職よりご法話があり、本山御用達のお供物（亀屋陸奥「松風」）と記念品が下付されました。

永代経は、永代にわたり仏を供養し、お念仏のみ教えが伝わってゆくようにと、できる人ができる時にできる事をさせていただく、相互扶助・お互い様の精神、助け合いや支え合いの心をもって受け継がれて来ました。今日では、ご本山で災害復興支援等に役立たせていただいております。

また、二十三日のお中日午前十一時からは彼岸中日法要が営まれました。

『教行信証』が生まれるまで　8

九歳で天台僧となられた後の親鸞聖人について、『御伝鈔』では「楞厳横川の余流を湛えて、ふかく四教円融の義にあきらかなり」と記されています。つまり聖人は、比叡山の楞厳横川で天台宗の教義を修学されたようです。

山城国（京都府）と近江国（滋賀県）の国境にある尾根伝いに南北に連なる比叡山には、延暦寺の三塔（東塔・西塔・横川）があり、横川は最も北に位置した場所です。この中の堂舎の一つに首楞厳院（単に楞厳院とも）がありました。平安時代の前期に、唐から帰国した円仁が、自身で書写した『法華経』を納めた根本如法塔を建立して開いたのが横川です。その後横川中堂が建てられ、平安時代中頃に活動した良源が横川の整備を進めて発展させました。また横川は、聖人が『高僧和讃』で七高僧の一人として讃えられている源信和尚（恵心僧都）が住していた地です。源信和尚は、天慶五年（九四二）に大和国の当麻（奈良県葛城市）に生まれ、九歳の時に比叡山に上り、良源に師事して様々な仏教教義を修得されました。そして、三十七歳の頃から学匠として名声を高めていきました。

その頃の比叡山は、世俗権力の後押しを受けて、摂関家出身の僧侶が要職を独占するようになり、教団の世俗化が進んでいました。しかし、源信和尚は世俗化する比叡山内の動きに批判的立場を主張し、学匠としての名利を捨てて横川に隠棲しました。また、師の良源の教えを受け継いで、浄土教に関心を持つようになりました。このような中で、源信和尚は永観二年（九八四）十一月から『往生要集』の執筆を始め、翌年四月に完成させました。

『往生要集』とは、人々が住む現世を穢土（煩悩に穢れた凡夫の住む迷いの世界）と位置付け、往生のための作法を示し、阿弥陀如来や極楽の様相などを具体的に著したものです。こうして源信和尚は日本浄土教の祖と位置付けられるようになり、横川は比叡山の中で最も浄土教の盛んな場所となりました。

聖人は、横川で修学されたことから、浄土教への関心を深めていかれることになったようです。

月忌納め法要
（おみがき）
十一月十六日
午後一時より

仏様ご先祖様に一年の感謝を
申し上げましょ

除夜会法要
十二月三十一日
午後十一時半より

除夜の鐘を
ついてみませんか
豚汁の振る舞いがあります